

平成27年 №51
はつはる号

あきばさん

発行所
秋葉山 新井寺
272-0144
千葉県市川市新井
1丁目9の1
でんわ047-357-8319
FAX 047-357-8399
mail: info@shinseji.jp
http://www.shinseji.jp
郵便振替 00150-2-282968
発行人 新井寺

年頭のごあいさつ



当山住持

平成二十七年改歳の令辰にあたり、
当寺檀信徒の皆様、当寺秋葉講中の皆
様、坐禅会・写経会・梅花講の皆様、
そして有縁無縁 信心の願主、すべて
の皆様の福寿ご多幸を心よりご祈念
申し上げます。

歳を重ねるにつれて、日々年々、月
日の流れの早さを「光陰矢の如し」と
痛感するようになりました。この世の
中であって、過去はすでに過ぎ去り、
未来は果たして訪れるかわかりません。
確かなことは、私たちは「たった今」
に生かされているということであり
ます。したがって、たった今の人生を、
命を決して無駄にすることなく、努力
精進と忍耐強さをもって、悔い無く
生き抜いていかねばなりません。

曹洞宗において、日頃どなたにも読み親
しまれている和文の經典『修証義(しゅ
しょうぎ)』「第一章 総序(そうじょ)」の
中で、大切な命の尊さを次のように説か
れています。

生死(しやうじ)の中の善生(ぜんしよ
う)、最勝(さいしやう)の生なるべし。
最勝の善身(ぜんしん)を徒(いたづ)
らにして露命(ろめい)を無常の風に
任(たの)むること勿(な)か。無常憑(むじやう
びょう)の草にか落ちん、身(み)已(す)で
に私(わたくし)に非(あら)ず、命は光陰に
移(うつ)されて暫(しばら)くも停(とど)め
難(たが)し、紅顔(こうがん)いづくへ
か去(い)りにし、尋ねんとするに蹤跡(し
ようせき)なし。

生死の中の人生にあつて、「たった今」
の命が最も尊く大切なのです。この尊

い命をむなしく過ごして、草の葉に宿
る朝露のようにはかない命を無常の風
にゆだねてはなりません。諸行無常の
世の中で、無常(死)というものは、
いつやってくるかわかりません。朝露
のようにはかない私たちの命は、いつ
どこで消え落ちるかわかりません。自
分の命は、自分の思いや願いの通りに
はならないのです。命は時間の流れに
流されて、一時もとどまってはいませ
ん。若かりし頃のおもかげは、すでに
どこかに消え去り、どこをさがしても、
跡形(あとかた)もありません。

どうぞ、皆様方におかれましても、大
切な命の尊さとはかなさを再認識され、
おたがい様に、限られた無常の命を大切
に、悔いなく生かされることを念じて、
年頭のご挨拶とさせていただきます。

本年も、どうぞ、よろしく御願ひ申し
上げます。心豊かな年でありますように。

合掌



あけましておめでとうございませす 今年もよろしくお願いいたします

行持報恩



山本崇文

(野田市 浄禅寺住職・戌とし)



今年、私が生まれ育ったお寺の先代住職(私の父)が遷化(せんげ・亡くなること)して二十年にな

ります。その頃、私は可睡斎専門僧堂に安居(あんご・修行)中の身でありました。大切な人を喪(うしな)って初めて、その尊さ有難さに気づくもので。私自身、まさに、その日から人生が一変したような気持ちでした。父でもある先代の存在、そして自分の無力さを痛感し、ただただシヨックで、月日がいらずらに過ぎていくような、無気力な修行生活を送っております。

この頃、ご供養の際『修証義』「第五章 行持報恩」を読経する機会が幾度かありました。ある日のこと、この読経中。はっと、自分の日々の考えや

行いに恥ずかしい気持ちになったことを今でも鮮明に覚えています。投げやりになつていた自分は、置かれている立場を軽く甘く考え、ただいたずらに時間を粗末に過ごしてしまつていたので。それが故に、周囲の方々にも、迷惑をかけたしまつた。そして、その日々はもう二度とは戻つてまいりませす。

自分は、「因縁」があつて、今ここに存在しているのだ。時間は刻々と過ぎていく。先代が命を以て示してくださいましたように、諸行は無常である。日々、物事を「やらされている」と思い違ひせず、「させていたただいている」という思いと行いでなくてはならないのです。沢山の方々の「ご縁」を頂戴して今がある。だからこそ、きょう一日の身命を尊び、そのご恩に報いるよう、日々の行いを軽んずることなく、粗末にすることのなきよう、心がけていかねばならないのです。年回忌ではありませんが、私の心の中では、二十年の節目の気持ちで「行持報恩」。今年も日々精進させていただきます。今年もよろしくお願いします。合掌

天使のわけまえ

二回目の成人式をわかえて



松井純照

(松戸市 龍仙院守塔・寅とし)



あけましておめでとうございませす。

昨年は、NHK連続テレビ小説『マッサン』、そ

して世界で最も権威のある賞を受賞したりと、「ウイスキー」がなにかと話題にのぼつた年でした。

「天使のわけまえ」という言葉をご存知でしょうか。ウイスキーの本場イギリスでは、こんな言い伝えがあるそうです。ウイスキーは、樽の中で長い間、熟成させて製造します。この熟成させている間、樽の中では「天使」が大忙しだそうです。あのウイスキー独特の香りや琥珀色、そして味を造るために大奮闘しているというのです。ウイスキーは、樽の中で長い間、熟成しているうちに少しずつ量が減少します。この減つた分を、大活躍した「天使」にわけてさしあげる「天使のわけまえ」というそうです。

私の人生の中にも、今日の私を形成してくださった多くの「天使」がいらっしゃいます。けれどもその「天使」へ、「わけまえ」(お返し)が出来ていくかどうか・・・。

今年、私は二回目の成人式を迎えます。初めの成人式の時、先代方丈様から「おかげさま」と書かれた色紙を戴きました。私の人生の「天使」に、おかげさまの「わけまえ」をさせていただくことが出来るよう、今一度、「おかげさまアンテナ」の感度をあげ、「脱、当たり前」を目指してまいりたいと思います。

「羊頭狗肉(ようとうぐにく)」になつてしまわないように、四十歳にふさわしく、足りないところは皆様の「天使」のお力を頂戴して日々精進してまいりたいと思います。

本年も、よろしくお願いいたします。

「羊頭狗肉」

羊頭を掲げて狗肉(犬の肉)を売る。

実質や内容が見かけと一致しないこと。見かけだけおしごまかし。



合掌

新年をむかえて



松井百合子

(当山 寺族・丑どし)



新春のお慶びを申し上げます。

今年も羊どし。

副住職の干支です。昨年の豪雨災害や御嶽山の

噴火などの自然災害には、天地さまのおそろしさを痛感しましたが、やさしくたくましい太陽の光は、新年のはじまりを寿(ことほ)いでいるようにも感じます。

「やらなければ」と思うこと、「やりたい」と想いめぐめることは、山ほどありますが、年齢を重ねてきますと、若い頃のようにはいきません。生老病死の無常の命の現実を感じています。「若い人に負けないように」と思いながらも、その現実と向き合うことは、きびしくも思えます。けれども、限られた時間、いのちを大切に、欲張らずに、一つひとつ自分に出来ることを精一杯につとめてまいりたいと思っております。

さて、本年五月より、かねてより計画念願しておりました「四国八十八カ所お遍路」の旅にまいります。一回の旅は

四泊五日、全四回で結願し、最終回には比叡山へ「御礼まいり」をさせていただきます。予定です。ぜひ、ご一緒におまいりしましょう。詳細は、お気軽におてらへおたずねください。

今年もよろしくお願いいたします。

合掌

四季を感じる花々



松井礼子

(花屋秋葉山店主・卯どし)



「お花っていいよねー」。

昨年、多くのお客様との会話に出てきた言葉です。花

は目や鼻で感じ、心で受けとめるものである。花が好きは理由を具体的に話してください。方にはなかなかいらつしやしません。しかし、花の魅力ってなんだろうと考えたときに、わたしが「お花っていいな」と思うのは、「季節の移ろい」を教えてくれるからだと思えます。

体感では寒い日が続いていますが、お花はもう春の訪れを知らせています。市場では、春のお花は十一月ころから少しずつ顔を出します。ストック・チューリ

ップ・スイートピー・アネモネ・フリ
ージア。お正月のアレンジにもたくま
さんの春のお花をいれておつくりしま
した。春のお花は香りがするものが多
く、その香りはわたしたちをやさしい
気持ちにさせてくれます。また、チヨ
ウチヨが舞っているように咲いてい
るスイートピーや、歌を歌っているか
のように開いているチューリップか
らは、**和やかな春の景色**をも連想させ
てくれます。

花屋秋葉山は、今年も皆様に「四季」
を感じていただけるお花をお届けし
ます。オリジナル仏花には、季節のお
花を入れておつくりします。春はスト
ック、夏はひまわり、秋はケイトウ、
冬はカラーなどなど。

本年も、よろしく願います。

* お墓参りのお花は常時ご用意して
おります（一対 千六百円）。

* 閉門の際は、恐れ入りますが、お
てらの玄関にお越しくださいませ。

* 一対 千六百円のお墓参りのお花
以外は、**予約制各種オーダーメイ
ド**でおつくりいたします。

（ご法事のお花・ご自宅のお花・御祝
のお花・ブライダルブーケ・鉢物・
プリザーブドフラワーなど）

「はい」と答えること



松井 量 孝



尼僧堂に上山する
とき、師匠に言われ
たことがあります。
「どんなことにも
『はい』と答えるこ
と」。当時のわたし

が、どれだけ理解できていたかはわかり
ませんが、行なうには、それほどむずか
しいとは感じてはいなかったように思っ
ます。けれども、いま、改めて考えてみ
ると、その深さとむずかしさを感じます。

自分に都合のよい理屈や言い訳をしては、
「はい」という返事ができない自分に
気づくからです。実に浅い自分の経験や
学びのなかで、いつのまにか築いてしま
った根拠のない自信や自分勝手な解釈が、
「はい」と答えることの大きな壁になっ
ているのだろうと思います。修行の原点
は「わたくし」をもちこまないこと、
それが師匠の教えだったのだと思います。
いまの一当は **むかしの百不当（ひゃく
ふとう）の力なり 百不当の一老なり**

『正法眼蔵』『説心説性』

的を射ようと、弓矢を放つけれども、一
向にあたらぬ。いまようやく的を射る
ことができた。この一当は、あきらめず
に弓矢を放ち続けたことが円熟された、
その「積み重ねの力」なのです。

「当てようとしてください。当たらな
くても『百不当の力』を信じてください」。
ある老師に言われたことばです。「百不当」
を恐れて、弓矢を射ることすらしていな
い。あーだ、こうだと考えるあまり、一
歩がふみだせない、縁に随うことができ
ない。わたくしをもちこんでは、自分を
迷わせ、悩ませている。考えても仕方が
ないことに頭を悩ませ、ふりまわされ、
脚下を見失ってしまっている自分に気が
つきました。わたしは、修行の原点、自
分の脚下を見失い、ともすると大きな心
得違いをしていました。

わたくしをもちこめば、「法」が聞けな
い。仏仏祖祖の行持をつとめることもで
きない。「百不当」を恐れて弓矢を射るこ
ともできない。それ故に、自我意識をも
ちこまない、すなわち「はい」と答える
ことが、仏道の原点なのだと思います。
「わたくし」をもちこむことなく、そこ
に身心をまかせ、縁に随って行じ続ける。
「百不当」は「百不当」のままに、どっ
しりと受け入れていく。あきらめること
なく、工夫や参究を積み重ねていく。そ
れを「一老」というのだと思います。

「どんなことにも『はい』と答えること」。
改めてここに銘じ、つとめさせていた
だきたいと思えます。

本年もどうぞよろしく願います。

（当山 副住職・編集小子・未どし）合掌